

# 子どもの主体を起こす読み優先の漢字教育研究会

## 12/26研究会の記録

於：能登川コミュニティセンター

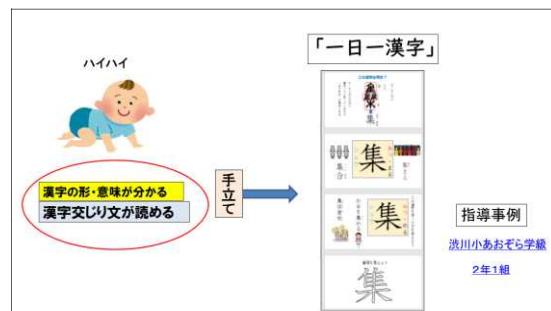
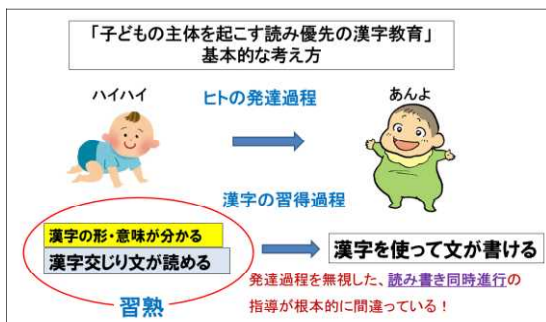
I 「子どもの主体を起こす読み優先の漢字教育」その考え方と実践事例  
7月研究会の成果と課題 (上野)

### II 実践報告


1. 三雲小 松村T 4年での取組(昨年度)  
1年生での取組
2. 五個荘小 古川T 4年生での取組
3. 蒲生北小 林T 各学年の取組
4. 坂本小 深田T 5～6年の取組及び坂本小全体の取組

III 総括コメント (井上)

I 子どもの主体を起こす読み優先の漢字教育その考え方と実践事例  
及び7月研究会の成果と課題 (上野)



ハイハイ




漢字の形・意味が分かる  
漢字交じり文が読める

習熟

手立て

指導事例  
波川小2年1組

「漢字音読名人」



ハイハイ



漢字の形・意味が分かる  
漢字交じり文が読める


習熟

手立て


日々の授業の中で漢字を見せていく

波川小 あおぞら学級  
昨日の話  
授業の板書  
漢字フラッシュ

ハイハイ




あんにょ



漢字を使って文が書ける

手立て

「漢字書き名人」



「漢字書き名人」の特長

- ①漢字音読名人の例文を使う→ 読み込んでいる文だから、やりやすい。
- ②「ひらがな文」を「漢字交じり文」に直す形→ 漢字を使える力がつく。
- ③文の中に既習漢字もたくさん出てくる→ 自然な復習で記憶が強化される。
- ④創作文づくり→ 具体的なエピソードを漢字交じり文で表現する力が育つ。  
その漢字に何度も出会わせ、時間をかけて体に染みこませていく

7月の研究会「1学期の取組」の成果と課題

【成果】◎3教材をトータルに使って指導したら子どもたちの漢字の習得率は確実に上がった。

担任する6年生で漢字の取り組みでの成果が大きく見られた2学期でした。学期末の漢字まとめのテストが平均86点でした。私も、子どもたちもビックリです。校長先生にも報告し、「漢字教育のおかげやね」と喜んでもらえました。また保護者にも学級通信で伝えていきます。特に低位の子の伸びが大きかったです。自主学習ノートには、漢字書き名人のプリントを参考に、まだ習っていない漢字を練習してくる子が何人かいます。漢字、成り立ち、文作りなど。校長先生からは、同じようにしているのに5年生と6年生で成果にも差があることを指摘されました。やはり指導者が目的を理解しているかないか大きいと感じています。3学期は平均点も90点を超えるだろうと予想されます。今後も継続してがんばりたいです。  
(市原小6年 伊藤 T)

【課題】●指導時間の確保が難しい

- ・学期配当の漢字は94字(5年)。1日2漢字でないと指導しきれない。
- ・漢字音読名人・1日2漢字だと10分で終わらない。

●教師の負担が重い

- ・子ども同士のチェックを大事にしているが、子どもに任せられず、自分がチェックしないといけないと思う教師が多い。だからチェックするのをとても負担に感じている。

## II 実践報告

### 1 三雲小 松村T 実践報告

#### (1)昨年度(4年生)の実践報告

- ・漢字音読名人、一日一漢字、漢字書き名人、確認テスト。これら読み優先の漢字教育教材は、多様な特性の子どもたちのいろんな学び方を保障する。書くことが得意な子、見て覚えるのが得意な子、人と会話しながら覚えるのが得意な子、それぞれにあった学び方ができる。それを発見して、素晴らしい教材だと思った。
- ・私の2年生の娘は、学校で漢字音読名人をやっているが、漢字音読名人から入ると全く読めない。一日一漢字を丁寧にやって、自分でその文章を書くと、その漢字が入ってくる。その後だと漢字音読名人が読める。人によって獲得の仕方が違うのだと思う。

## 取り組んだ子どもたちのアンケート結果

### ◎漢字音読名人のアンケート結果

漢字音読名人で力がついたと思いますか。漢字は好きになりましたか。

- やってよかった・・・28人
- 自信がついた・・・18人
- 漢字が好きになった・・・17人
- 楽しかった・・・28人
- もっとやりたい・・・16人
- 漢字が得意になった・・・18人
- あまり自信にならなかった・・・0人
- 漢字が嫌いになった・・・0人
- 楽しくなかった・・・0人

(33人中延べ人数を表記)

### ◎1日1漢字に取り組んでみてどうでしたか。

- 力がついた・・・28名
- 楽しかった・・・24人
- ちょうどよかった・・・24人
- 2・3個一度に習いたかった・・・5人
- もっとたくさん一度に習ってもよかった・・・2人

- ・一日一漢字は、エピソード記憶に結びつけるという点ですごく楽しかったようだ。
- ・漢字書き名人  
これを宿題にすると宿題忘れが無い。子どもたち同士が〇つけをすること、自分の書いてきた文章を友達に読んでもらいたくて、ほんとに宿題忘れが無かった。

## (2)今年度(1年生)の実践報告

夏休み明けから漢字指導を始めた。

### ■一日一漢字

- ・気に入らないことがあるとすぐ教室を飛び出す子が「漢字の勉強をするよ」と言う  
と、戻ってきて勉強を始める。
- ・「漢字の好きな人」と聞いたら26人全員「好き」と答えた。
- ・子どもたちが「漢字かんたん」というので、「漢字とひらがな、どっちが簡単？」  
と聞いたら「漢字！」と全員が答えた。「漢字って組み合わせやん」と言う。

### ■漢字書き名人

- ・文章を書くのが大好きで、枠に収まらずに紙一杯に書く子もいる。「こんなうわさ  
があるんだよ」という銭天堂シリーズを勝手に作って書いている。習っていない  
「洗面所」なんて漢字も使っている。
- ・未習漢字はひらがなでいいのだが、漢字で書けるから書こうとする子もいる。それ  
でまた自尊感情が高まっている。
- ・まだ字の形がうまく取れない子も書くことを楽しんでいる。
- ・最初、文が作れず母親と一緒にやっているという子がいた。学校で一緒にやること  
にした。「上」という漢字で「上からりんごが落ちてきた」という文を私が提案し  
たら、その通りに書かずに「上からトリケラトプスが落ちてきた」と書く。そこに  
その子の意志を感じる。やがて「できるから自分でやる」と言って自分で書ように

なった。

- ・自分が楽しいと思う文を考えて書いてるから、文章を作ることに抵抗がない。作文を書くことも字を書くことも抵抗がなくなったのは、これのおかげだと思っている。

#### ■板書

- ・未習の漢字をふりがなをつけて書くのを当たり前に受け止めている。「その漢字、前に出たからもう読める」と得意になる子もいる。板書に書かれる文字を集中して見ている。

#### ■2学期の成果

- ・三雲小はとても課題の重い学校だが、1年生26名、学期最終の12月22日までに漢字テストは全員合格している。最低の子でまちがい2つ、あとはほぼ百点。子どもたちの主体が引き出されていった結果がそうだった。

#### 〔協議〕

##### Q 漢字テストの練習方法について

ドリル名人は、1漢字につき、3文。5つの漢字で15文の練習は子どもたちにとって負担が重いと保護者からの声があった。(学校評価)

自分の学級の子どもたちは「簡単」と言っているのだが、中にはしんどいと感じている子もいる。負担にならないで漢字テストの練習方法はないか。

自分の学級では、宿題で15問練習を2日やったら次の日テスト、その次の日は再テストという形でやっているが。

深田：坂本小でも漢字ドリル名人の練習が負担だという声が各学年から上がってきた。高学年になると確認小テストは10問単位になるので、30文の練習となると30分かかる。だから全部やらせようとせず、小テストに出る1文のみの練習とし、余力があったら全部やってもいいという形にしている。

上野：宿題の漢字書き名人は子どもたちが喜んでやっているからよいが、15問練習はノルマに陥る恐れがある。また、再テストも不要ではないか。必ずクリアさせようと考えず、繰り返し練習する中での自然な定着を待つ。子どもたちにとって最も確実な定着につながる練習はチャレンジ欄での創作文作りにある。

井上：「一つだけでいいよ。それが宿題の標準。でも、書きたい子は3文やったら尚いいよ」という形にした方がやる気が起きる。またその一文は教科書から採ったものなので、理解も深い。「やらされ感」でなく「やってる感」で進めることが大切。

#### ★「一日一漢字」から入って「漢字音読名人」につなげる形が子どもたちは学びやすい

教材の作成が「漢字音読名人」に始まり、その後「一日一漢字」の順で作ったので、指導もその流れで進めてきたが、松村 T の娘さんのように、その流れでは難しい子

もいる。子どもたちにとって学びやすい形をもう一度考え直したい。

井上：イメージとエピソード記憶を動かすというのが一番心に深く入る。一日一漢字で、字の形を十分見て、話し合っ、そこが入ったら、知的興味を起こす。主体が起きる。あとは音読名人で形式的に流していても大丈夫。

## 2. 五個荘小4年 古川T実践報告

自分の学級は29名中2名が特支(知的)。算数の課題が大きく、九九の習得は知的の2人に及ばない子が数名いる。学力的に厳しく音読がたどたどしい子が12人。発達的な課題のある子が3人。家庭環境に課題がある子が5人いる。授業では、学力の高い子数名が発言し、他の子は黙って聞いているというのが当初の状況だった。

### (1)1学期の取組

漢字音読名人を1週間先行し、一日2漢字をして、書き名人の表を学校でし、裏を家でする。

#### ◎成果

漢字を書こうとする子がずいぶん増えた。板書の漢字も「習っていない」ではなく「何と読むの?」という反応が多くなり、「もっと大きく書いて。書いてみたい。」という子が増えた。

漢字音読名人のおかげで、ペアやグループだったら話せるという変化が起きた。「はい、グループになって」と言えばパッと動ける。学力が低い子が前に出て話をするのができたり、ホワイトボードに書いて一緒に考えあったりできるようになった。特に底辺の子どもたちが意欲的になった。

#### ▲課題

結果に結びつかない。漢字テストで80点以上の子は数人。40～50点、中には0点の子もいた。読めても書けない。漢字の多さも課題だった。7月上旬に成績一覧表提出。それまでに終わらせなければならぬということですのでごく急いだため、習熟が不十分だった。

### (2)2学期の取組

やはりエピソード記憶が重要と考え、指導の形を変えた。

#### ■一日一漢字・漢字書き名人・漢字ドリル名人

月曜日に1時間取り、その週に指導する予定の7つ漢字を一気に見せる。火曜日から朝と国語の時間に一字ずつ、という形で書き名人まで丁寧に指導する。

忘れてくる子もあったが「8時15分までに出して」と言っているので学校でやっていた。

書き名人については、負担になりそうだと思う時は、部分を限定して取り組ませた。

金曜日にドリル名人を使う。1つ指定する場合もあるし、自由にやらせる場合もある。

## ■音読名人

音読名人は業間の手洗いタイムに行った。その結果子ども同士の関わりがうんと深まった。女の子の中に男の子も自然に入っている。特支の子も全く普通にみんなとやっている。2学期最終週に3学期分を渡した。一日一漢字を先にやり、併せて漢字音読名人をやるようにしたら、学力の厳しい子が3学期の漢字まで全部読めてしまった。

### ◎成果

- ・漢字テストの結果も改善はした。34点→56点、24点→75点、0点→40点（漢字ドリルで探しながら）  
54点→69点の子は、止め、払い等の小さな間違い。即「再テストする！」と言い、92点。エピソード記憶に残っているからすぐ修正できる。
- ・特支の子も同じ教材で同じようにやっているから、一緒にできる。だから、すごく仲間意識ができてきた。
- ・音読がたどたどしかった子どもたちが、2学期、教科書に無い文をいきなり読ませても読める子が増えた。前後の文脈で推測して読めるようになった。読むことが苦でなくなった。
- ・0点だった子が、2学期の終わりにやった音訓カルタ作りではとてもいい作品に仕上げてきたので感動した。1学期、出さずにおいた書き名人を探してきて提出した。漢字が嫌いでは無くなっているのだなと思えた。

## ▲課題

自分は追い込む指導をしなかった。それでいいと思っていたが、他の学級は、ドリル名人の5漢字×3文、15問練習プリントを作り、毎日やらせていたので、結果としては自学級は及ばなかった。

学級づくりとしては、一対一の関係も深まるし、得意・不得意の差もなくなつてよかったのだが、そこを他学級の担任に理解してもらうのは難しかった。

井上：テストの点は上がらなかったけれど、クラスの雰囲気は確実に変わった。

（古川：特支の子であろうと誰とでも一緒に活動できるクラスになった。）

グループのあり方とか、人との付き合い方が変わったということシェアする機会を持てると良かった。私はそっちの方が大事だと思う。まだ、4月から始めたばかり。漢字は6年間かけて学ぶものだからあせらない方がよい。

〔上野補足〕 今、学校教育に求められている『非認知能力』の育成

（ネットから収集）

世界の教育界で、21世紀型学力として『非認知能力』が注目を集めている。非認知能力とは、数値化できない「生きていくために必要な能力」のこと。「意欲」「情熱」「知的な好奇心」「協調性」「自己肯定感」「表現力」など、数値では測定しにくい総合的な人間力を指す。

非認知能力が注目されている理由の1つに、非認知能力と認知能力の相関性がある。

非認知能力が伸びると認知能力（テストの成績）も高まることが、いくつかの研究で示されている。文部科学省が実施している全国学力・学習状況調査でも、学習意欲が高い子の方が、学力が高い（平均正答率が高い）傾向にあることが報告されている。逆に、認知能力だけを過度に鍛えることは、学ぶ意欲を奪いかねない。しっかりと非認知能力の土台を作った子は、将来社会でも活躍できる人材に育っていく。

★読み優先の漢字教育は、「非認知能力」を確実に高める取組だといえる。

#### ★「月曜日に1週間分の漢字をダイジェストで見せる」という指導について

松村：ダイジェストで見せてしまうと、火曜日からの学習は新鮮な出会いにならなくてもつたいないような気がする。ダイジェストでやるならその7漢字についてのフラッシュカードをやった方が楽しくて見通しも持てると思う。

上野：ダイジェストを無くして、一字ずつ新鮮に出会わせていく方がエピソード記憶として定着しやすいのではないか。

#### ★「一日一漢字」を教えた続きにその漢字の「漢字音読名人」をみんなで唱和するとよい

井上：その方が子どもの思考の流れがスムーズになる

松村：漢字音読名人の文章の意味がよく分かっていない子が結構いる。みんなで唱和して、「これ、どういう意味か分かる？」と話し合うのも有効だと思う。

### 3. 蒲生北小の取組 林T報告

東近江市では、多層指導モデル MIM に従い、ひらがなの特殊音節につまずく子どもたちの聴写テストを10年前から行ってきた。その取組をとおして早期発見、早期対応の体制が定着したので、今年から、3年生以上の子どものための課題であった漢字についての取組を始めた。蒲生北小はこれまでの実践の土台があるので、このタイミングで「読み優先の漢字教育」に全校で取り組むことにした。

多層指導モデル MIM と読み優先の漢字教育は考え方で合致している。

〔注〕 MIM とは（サイトからの引用）

MIM を開発するに至った一つのきっかけについて紹介します。

4年生を目前に控えた A 君がお母さんとともに相談にやってきました。とても表現豊かに、熱中していたサッカーの話をしてくれました。クラブチームにも入っており、休日も友だちとサッカーをして遊んでいるとのこと。

ところが、「ちょっと、この本読んでみようか」といった途端、表情は一変しました。ほぼ2学年下の読み物でしたが、先ほどまで交わっていた会話とは別人のように、たどたどしく、自信のないものでした。読み進めていくうちに、1年生で習得しているはずの文字学習の基礎である「っ」や「きゃ」といった特殊音節が全く読めていなかったことがわかりました。この3年間、どのようにして学習に臨んできたのだろう……。想像していた私に、「俺、勉強嫌い。学校には要らない存在なんだ」とつぶやいた彼。言葉通り、既に学習全般に抵抗感を示していました。それから、彼がつまずいている最初のところに戻って、仮名文字の読み、特に「特殊音節」の読みを焦点を当て、

集中的に指導を行いました。音と文字との関係が視覚的にわかるように、また自分の体を使って確かめられるように、試行錯誤しながら学習を進めていきました。すると、これまで3年間習得できていなかった彼が、しっかりと自分のものにしていったのです。

その時にこう思いました。「学習法を工夫することで習得できるのだったら、なぜもっと早くこうした手立てが打てなかったのだろう。仮名文字の読みは、国語のみならず、全ての教科、さらには生活場面にさえも大きく影響してくる。もし、もっと早く、こうした力が習得できていたのなら、彼の学習活動、生活はどんなにか変わっていたことだろう」。つまずきを抱える子どもが、少しでも学びやすいよう、指導の仕方をあれこれ工夫することが重要な言うまでもありません。一方で、もし、彼(彼女)らに効果的な指導法があるとすれば、それはより多くの子どもたちにも通ずるかもしれません。そして、授業の中でこうした指導を行うことができれば、同様のつまずきを示すかもしれない子どもを未然に

#### ■ MIM(ミム)とは

防ぎ、つまずかずに済む子どもを増やすことができるのではないのでしょうか。つまり、A君らに試みた指導法、つまずきを示した子どもにとって効果的な指導は、通常の授業の中で用いても、きっと効果があらわれるのではないだろうかといった考えがMIMの根底にあります。

MIMは、Multilayer Instruction Modelの略で、多層指導モデルという意味です。

多層指導モデルMIMでは、通常の学級において、異なる学力層の子どものニーズに対応した指導・支援を提供していきます。特に、子どもが学習につまずく前に、また、つまずきが重篤化する前に指導・支援を行うことをめざしています。基本的には以下のような3層構造になっています(図1)。

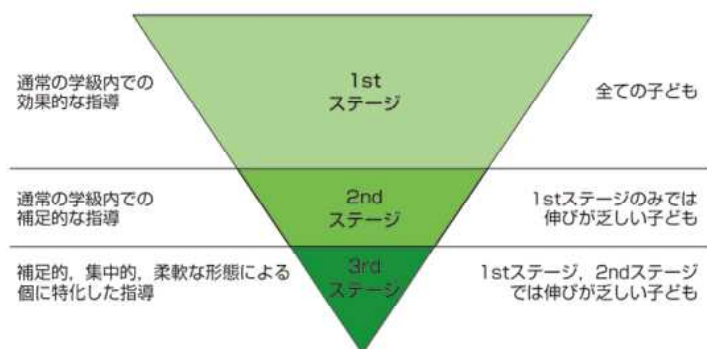


図1. 通常の学級における多層指導モデルMIM(Multilayer Instruction Model)

## ■ アセスメント

[1年生]

ひらがな聴写テストと漢字テストとは相関があり、ひらがなの読み書きにつまずいた子は漢字でもつまずくと考えられる。

まず、1年生の2学期に読み書きに必要な基本の力について、発音チェックのシートを作り、読み書きが困難になるおそれのある子を把握した。担任と子どもとが一对一で関わる時間を子どもたちはとても喜んでくれ、一对一の関係の大事さを実感した。

[3年生]

2年生までの漢字がどれほど習得できているのか、読み・書きの簡単なテストを行って調べた。

## ■ 取組の実際

一日一漢字・音読名人・漢字カルタ・書き名人・小テスト、これらの教材を全学級で取り組んでいる。毎日、帯で取っているスキルアップタイム10分と、国語の時間を使ってやっている。

漢字音読名人で取り組んできたベースがあるので「書き名人」もやろうということになった。1学期は指導する漢字も多く各担任にとまどいがあったが、2学期、ぐっと少



なくなり、余裕をもって取り組めたのですごく楽しくやれたと担任も言っている。  
やはり、一日一漢字から入るのがよいということだった。最初の出会いであれこれ考え合うことができそれがとても楽しかったという。

子どもも教師も教材に慣れてきたことで、各担任それぞれの工夫した取組もするようになった。全職員が同じ意識ではないので、研究部会の教師が先行研究して低中高三部会をリードする形になっている。

#### ・漢字音読名人

事務の先生の段取りで、全児童がファイルを持っている。漢字音読名人がポロポロになるぐらいまで使い込んでいる。いろんな文章が書かれているし、生活の中で使うことができる。習熟度に幅がある子どもたちにうまく対応できる。

6年生の子どもたちは1年生からずっとやってきているので、子どもたちの関係性がすごく良くて、どの学級でも、時間になったすぐ自分たちで始めるのが当たり前光景になっている。

#### ・書き名人

2年生では、どの部分を漢字に直すといいのか分かりづらかったが、傍線を入れたものに改善することでとても使いやすくなったとのこと。チャレンジ欄に、「辞典を使って書きなさい」という指示をする学年もある。

#### ・一日一漢字

今年からタブレットが入り、一日一漢字を子どもたちが自由に見られるようになったので、必要なところを繰り返し見られるようになった。

#### ・自作音訓カルタ

4、6年生では実際にカルタを作って使っている。

#### ・小テスト

4年生では教室にテストに出る文の一覧が貼ってあり、必要な子はそれをチェックする。漢字大好きで、何も見ないでチャレンジしたい子は見ない。50問テストも問題は公開せず、勉強の仕方プリントを配布している。

現在、漢字指導についての各担任の実践記録集を作る予定で進めている。

職員会議の時、時間を決めて実践紹介もしてもらっている。

支援学級の子どものたちの語彙が増えている。

上位層の子どものたちの伸びが大きい。それにつられて中間層も伸びる。

- ・支援の必要な子についてはマス目が必要。
- ・通級の子どもへの指導として、1学期に習う漢字一覧と、その漢字を使った熟語の該当部分の漢字だけ書いて練習するプリントを少徳 T が作成している。漢字音読＋名人に取り組んでいる子だからできる教材とのこと。

図にしめす 指シ	肉ガン ガン科	手シユツ 若シユツ	眼	術
順シヨ シヨ文	ヨウ器 内ヨウ	のべる 記シユツ	容	述
前テイ テイ出	シ料 シ格	人がいえる ソウ加	資	増
みちびく 先トウ	対オウ 水がます		応	増
問題まどく快 理カイ	たしかめる カク実	自画ソウ 想ソウ	確	像

## ■2学期の総括

- ・教師側の工夫がいろいろできてきた。
- ・いろんな階層の子に幅広く対応できる教材だという実感が深まった。
- ・学校全体に浸透していくにはまだまだ時間がかかる。継続して取り組んでいきたい。

## ★林Tの実践

・3年から知的支援学級に入級した自閉傾向の4年女兒。窓際のトツとちゃんのような子。お話の理解力はあるが、特殊音節の習得がとても難しい。特殊音節の指導ばかりやっても教師も子どもも少しも楽しくない。この子の知的興味にあった教材を探している中で読み優先の漢字学習教材に出会った。それで、3年生から知的学級で一日一漢字・漢字書き名人を1年生から始めて毎日やってきた。4年生になって全校で取り組むようになり、その子もみんなと一緒に1日2字ずつやっていたことにした。漢字書き名人で読みを書くところは、下に答えがあるので書けるのだが、そんなめんどろなことは絶対やらない子だった。それが、教材に慣れ親しんでいること、学級全体の雰囲気の中で、書くようになった。その結果、習得の難しかった特殊音節が正しく書けるようになってきた。そして、まだひらがな文だが、自発的に文章を書くことも増えた。書き名人の表は学校でやり、裏は宿題でやる。夏休みは、その文章を全部書いてくるとい課題を与えた。2学期になると、自分で声を出して読みながら字を書くようになった。この教材に出会えたことをとてもうれしく思っている。

#### 4. 坂本小 深田T報告

去年から5、6年とクラスは変わったが持ち上がっている。2クラス、学年60名。

漢字教育の原点「漢字が読めれば文が読める。文が読めれば情報が取れる。知的好奇心に満ちて自ら学びを求めていく子になる。」のとおり、文が読めれば自ら学ぶ子になるということを実感した2年間だった。

一対一の関係性は私も重要だと思っている。漢字音読名人・漢字書き名人で育んだ一対一の関係性を通して、クラスの男女ともすごく仲がいいし、学級の雰囲気すごく良くなったことを実感している。

非常に興味深い結果が出たのが学・学テストの結果だ。今年も滋賀県は最下位。坂本小も地域的に課題の重い学校だ。今まで、全国平均の3ポイント下が滋賀県で、その3ポイント下あたりをうろついているというような学校だ。それが、今年のテストでは、全国平均を国語で4.3ポイント上回り、滋賀県平均と比べると8ポイント上回るといっては驚異的な数字が出た。算数については、今年のテスト問題が易しくて差が開きにくいということはあったが、全国平均に比べて0.8ポイント、滋賀県平均より3ポイント上回った。

漢字教育だけの成果とは言えないが、去年一年間読み優先の漢字教育に取り組んできたことがすごく効果があったということを実証できたと思っている。この学年は比較的低位の子が少ない学年ではあるけれど、これだけの成績をあげたことにはそれなりの要因があると思っている。

学・学テストは記述式で答える問題が多い。「30mを1とした時、12mが0.4にあたる訳を書きましょう」という問題で、坂本小は全国平均を2.7ポイント、滋賀県平均を7.4ポイント上回った。書くことに重点を置いてきたのがこういう結果につながったと思っている。



坂本小の成果に驚いて視察に来る学校が5～6校ある。研究している算数の授業と坂本タイムの漢字学習を見てもらい、放課後説明をしている。「漢字なら取り組みそうだな」と感じる学校が多いので、今後そちらにもアプローチできたら、と思っている。

来年度、坂本地区4校で取り組む提案を校長がしようと考えている。全教材をトータルに使うというのは、すぐには難しいかもしれない。その場合「とりあえず一日一漢字と漢字音読名人をやってその後市販の漢字ドリルを使う」という提案をしようかと考えている。それから書き名人やドリル名人に進めばよい。

## 2年担任衣田Tの1. 2学期の実践

2年の他の担任はこの取組を知らないし、2年生で出てくる漢字はすごく難しいので、最初は子どもたちも教師もしんどかった。だんだん慣れてくると、やりやすいやり方を見つけて取り組むようになった。

自分の学級では、1学期25字の漢字について、平均点が92点。2学期は96点。半数は百点が取れている。1学期12点しか取れなかった女の子が2学期中頃は92点と成長している。ただ単元テストでは大きく伸びたというわけではないのが課題と考えている。時間の確保が難しいというのも今後坂本小みんな考えていきたい。

### ◎進め方の修正提案

今まで音読名人を先行させていたが、一日一漢字を先にする方が子どもたちに定着しやすい。2学期、その形で進めたが、子どもたちは何の抵抗もなく受け入れた。その方が読みにスムーズに入っていける。6年生なので音読名人から始めてもある程度読めるが、低学年では一日一漢字を先にやるべきだと思っている。

1日2漢字。動画を見せて筆順をやり、その漢字の音読名人を全員で読む。私のクラスの場合、一人一漢字を割り振り、漢字音読名人に出てくる熟語も含めて5・6個の熟語とその意味を調べさせてあるので、その時それを発表させている。新出漢字でない熟語については、みんな考えてながら意味を確認している。

その後、書き名人を2枚配るのだが、その日の漢字ではなく、もう読めるようになった数日前の漢字を与える。子どもたちは抵抗なくやっていた。

### ★ 一日一漢字で習う漢字と書き名人で書く字をずらせる

[第1週]				
(月)	一日一漢字①②	音読名人唱和と意味確認①②		
(火)	〃 ③④	〃	③④	漢字音読名人の聞き合い
(水)	〃 ⑤⑥	〃	⑤⑥	※ 既習漢字の読み習熟 先に進みたい子は自由に進ませる
(木)	〃 ⑦⑧	〃	⑦⑧	
(金)	〃 ⑨⑩	〃	⑨⑩	
[第2週]				
(月)	一日一漢字 ⑪⑫	音読名人唱和と意味確認⑪⑫		書き名人①②
(火)	〃 ⑬⑭	〃	⑬⑭	〃 ③④
		↓	↓	↓

この形を取ることによって完全な「読み習熟の後に書き」の漢字学習になる。

2年間やってみて、やはり一日一漢字が一番大事だと思うようになった。最初に一日一漢字をやって、それから音読名人に入っていく。早い子は進めば良い。その後に書き名人が来る、という提案だ。

坂本小は次年度も取り組むことになっているので、一日一漢字と漢字音読名人については、3学期のうちに次年度の新出漢字に入り、20字ぐらいは終えておく。そうすれば、4月に入ってすぐ書き名人に入れる。

★漢字学習の進度が単元テストに追いつけないという問題について

単元テストの表だけやらせて裏はしない。漢字の指導が済むのを待って裏をやらせた。それで問題無くやれた。

★チャレンジ欄の活用について

学・学テストですごく文章が書けるようになったのは、チャレンジ欄の活用が非常に大きかった。「書き名人チャレンジで使ってみよう」プリントを作成して校内に配付した。主語を指定する、さまざまな接続詞を使う、使ってみたい表現例等。

書き名人 チャレンジで使ってみよう

① 語を指定

先生は、 お父さん・お母さんは、 祖父・祖母は、  
 兄・姉は、 弟・妹は、 犬・猫は、 など

② 接続詞を指定

順接 (だから・それで・すると)  
 逆接 (しかし・それでも・ところが)  
 並列 (また)  
 列挙 (まず、次に、最初に、次に、最後に、)  
 添加 (そして・それに・しかも)  
 選択 (または・それとも)  
 説明 (なぜなら)  
 要点 (そのためには・それには)  
 補足 (ただし・実は・実のところ)  
 言い換え (つまり)

③ 使ってみたい表現

ふと見ると ・ よく見ると ・ 耳をすますと  
 振り返ると ・ まるで○○のように(ような)  
 見上げると ・ その時です

こんなふうに題を与えることで書く力が確実に伸びる。  
 また、子どもたちの作った文章を読んでやったり通信で紹介したりすることが子どもモチベーションを大いに高める。

坂本小では教材の印刷を業者に頼んだ。漢字音読名人年間3冊600円。書き名人(プリント)が1100円。ドリル名人が600円程度。  
 漢字音読名人は3年までは1ページ3文字バージョンB5版が使いやすい。4年生以上は1ページ6文字バージョンA4判でよい。

## 漢字教育の成果

- ・文章が読めるようになる。
- ・文章が書けるようになる。
- ・主体的学びに向かおうとする。
- ・学習が楽しくなって成績が上がった。国語だけでなく、6年になってすごく算数の点数が良くなったという保護者は多い。

## 指導の工夫改善

- ・書き名人の子ども同士のチェックでは不安で2学期も教師がチェックしている学級もあった。私自身は裏だけのチェックで済ませていた。
- ・書き名人は6年生までマス目を入れてほしい。縦罫より丁寧な字になる。

## Q読書量が劇的に増えたが、その手立ては？

- ・宿題に読書を入れた。表を作って、本の題名と読んだページ数を書かせて毎日提出させた。3週間ぐらいたったところで評価し、通信で紹介するなどした。家での読書は何を読んでもいいことにしていた。

## 秦荘東小 今村

- ・本校は読書が課題だったが、今年10%上がった。読書の質も上がっていると町図書指導員が言っている。
- ・短絡的に漢字のテストの成績を上げる手立てより、日記や文章を書く時に使える力を育てることの方が大事だ。テストにこだわる必要は無いと思う。
- ・大きな課題は、ドリルに縛られるか否か。  
ドリルで追い込んでテストの成績を上げるという今までのやり方とのギャップを克服し浸透させていくにはまだまだ時間がかかる。
- ・教材の印刷については、今集まっているみんなの分をまとめて印刷すればかなり安価になると思う。300円ぐらいでできる可能性もある。

## 海外T

- ・愛荘町は水曜日がノーメディアデーになっていて、読書に取り組んでいる。50冊読んだら、私の作った葉をプレゼント。100冊読むと校章入りのクリアファイル、150冊読むと写真を図書室前に掲示してもらって殿堂入り。木曜日になると職員室前に行列ができる状態。
- ・私も宿題に読書を出すことをやっていた、宿題だから読むという子もいるので、それもいいと思い、若い教師にも勧めている。
- ・教科書の音読練習は、国語に限らず理科・社会の教科書の音読練習もやらせていた。

## 5. 総括コメント 井上

- 私の二人の息子は正反対で、一人はひらがなが読めない子、もう一人はものすごく記憶力のいい子。でも同じ方法でとてもうまくやれた。だから、これはどんな子にも向く方法なのだというのが私の確信だった。自分の子どもにやったやり方と学校での指導のポリシーは同じでよいと考えてきたが、そのことが今、どんどん実証されつつある。

もともとこれは、人の話が正確に聴ける、自分の言いたいことがきちんと言える、その力をつけたいと思ったので、「文章でやる」ということが一番の基本なのだ。そのとき、漢字は表意文字なので、意味から入るということ、エピソード記憶とイメージを使ってやることを基本におくべきだと考える。一日一漢字から入る方が心が動くということが明確になったことが今回の協議の一番の印象。

- 国際学校の副校長を2年間やった経験と併せて言えば、国語の時間は外国に比べて大変少ない。その少ない時間の中で漢字をたくさん覚えねばならない。外国の教科書もとても厚い。サイドリーディング、本を読むことがとても重要視されている。日本は読書について学校からの指示がとても少ないと感じている。
- もうひとつ注目してほしいこと。子どもたちが1～6年に進級していくとき、担任は替わるが子ども集団はずっと同じ、同窓集団だ。その同窓集団の中に自分の居場所が見つかっているという感覚で育っていくこと。それが人として安定し、自己肯定感を高めていく。点数が取れるということだけに注目してしまうと、競争させることになってしまう。同窓集団を育てるのだという感覚でこの漢字教材を扱ってもらえるとよい。
- 漢字を習得するといろんな教科の力が伸びることが報告された。だから、漢字を国語の一部と考えるのではなく、独立した「漢字科」という考え方で、毎日少しずつ継続させる。そうすれば、国語の時間はもっと深い学習ができる。
- もうひとつは学年配当の漢字に縛られ、上学年の漢字はひらがな表記の教科書になっている。常用漢字も含めてすべて表記された教科書であれば、子どもたちはもっと自然に漢字を習得していける。
- 書き名人のチャレンジ欄での文作りで力がつく。使用の手引きに書き方の指示も書き加えるとよい。